

【オンライン社会学講座】イソップ物語で浮かび上がる現代日本とアメリカ  
「ライオンと鼠：日米規範文化比較論・前編・」

山口一男（シカゴ大学教授、RIETI 客員研究員）

注）この物語に登場する学生の名はすべて仮名である。また、学生の意見は実際にはある一学期のものではなく、「日本社会論」を何回か教えているうちに出てきたものをまとめ且つ自由に脚色している。その意味で以下の話は純然たる事実では全くなく、いわゆる事実（ファクト）とフィクションの中間のファクションである。

私がシカゴ大学で『日本社会論』を教え始めたのは比較的最近である。元々の私の専門は就業や、転職や、失業や、結婚や、出産や、離婚といった人生航路の分岐の原因や結果についての統計的な分析やその方法の研究で、何千人もの人を何十年にもわたって追いかけるアメリカならではの金のかかる社会調査データを基にしていた。またそういったデータはほとんどアメリカ社会に関するデータなので、その分析を専門とする私は自然にアメリカ社会についての専門家となり、日本についての関連する研究は出生暦や職歴に関して人々を追跡調査するパネル調査データが手に入るようになった最近になってようやく始めたばかりだった。

『日本社会論』のコースはこういった私自身の最近の日本研究とは全く別の意図で始めたものであった。それはアメリカに住む一日本人として専門を通じて日本の事をアメリカ人に伝えたい、また伝えなければならない、といういわば半ば欲求、半ば義務感の産物であった。

私は『日本社会論』を学术论文の議論を中心とした専門家向けの大学院コースでなく、より気ままで自由な学部学生むけのコースとして教えることにした。日本社会などというものを包括的に教えることはおよそ不可能なので、日本について教えるというより日本を題材にしながら社会や文化の比較の視点から柔軟な多文化的な思考を育むといった点を重視したからである。コースを取っている学生は15人程の少人数で、約3分の2が社会学科など社会科学部の学生、残りが人文学部極東言語文化研究学科で日本語や日本文化について学んでいる学生だった。クラスはもちろん英語で行なわれ、日本人の著作はすべて英訳を基にしている。

教えるといってもアメリカの大学のリベラルアート教育では、何々を教えるというより、何々で教える、というやりかたで、思考の自由と批評的精神が一番大切であり、教師はいわば料理の素材と処方箋についてのいくつかのヒントを与え、あとは学生に料理させ、その結果について「うまい」とか「まずい」とかを議論するといった風のものであった。

日によって中根千枝だの、ルース・ベネディクトだの、土居健郎だの、ロバート・コールだの、村上泰亮だの、ロナルド・ドーアだの、丸山真男だのの著作が素材として与えられ、料理された。日本を未だよく知らない若者達に彼ら大御所の著作を断片的かつ勝手気ままに議論させることは、日本の感覚から言ったら恐れ多いことかもしれないが、学生の知的精神に刺激を与えるというコースの目的にはかなっていた。素材はあらかじめ学生に与えられており、学生は前もってそれに目を通しておくことが、クラスの討論の前提になっている。

その日の素材は『法と社会』と言う英文の学術雑誌に出たアーサ・ロゼットと我妻洋の共著の『謝りの意味：日米の違いについて』と題する論文であった。論文では自分が悪かったと謝ることが、日本では当事者達の感情的な和解をまず達成することを目的とするのに対し、アメリカでは損害の賠償責任を認める行為である、などの日米の文化的違いの議論が中心であったが、私はその中ではむしろ簡単に触れられている、イソップ童話の『ライオンと鼠』の日本版とアメリカ版が違う、という話に焦点を当て、そこを学生に議論させることをもって、その日の素材の料理法の処方箋とした。

アメリカ版の『ライオンと鼠』の話とは、次のような話であった。

ある日、ねずみたちが集まってお互いの自慢話をしました。

私たちの中で一番勇気があるのは、誰だろうか？

すると、一匹のねずみがいいました。

それはもちろん私さ。ほら、向こうの草原に一匹のおすライオンが眠っている。私は、あのライオンの背中の上を駆け抜けることができるぞ。

他のねずみはみな感心しました。そんなことができるほど勇気のあるねずみはほかにいなかったからです。そこで、そのねずみは自分の勇気を証明するために出かけました。そばまで来ると、ライオンはまだよく眠っているようです。ねずみはしばらくライオンの様子をうかがっていましたが、やがて

これならだいじょうぶ。

意を決して、ライオンの背中に駆け上がりました。ところが、ねずみが背中からおりるやいなや、今までよく眠っているように見えたライオンはパッと跳ね起きて前足でねずみを押さえてしまいました。

誰だ、私の眠りのじゃまをするのは！

ライオンはねずみをただ一口で呑みこもうとしました。

待ってください。私を食べるのはいつでもできます。その前に私の話を聞いて下さい。

ねずみは急いで言いました。

私は小さい肉のかけらで、食べてもあなたのおなかのたしにはならないでしょう。それより今私を自由にすれば、後で私はもっと良いことをあなたにできるでしょう。

それは、どういうことかな？

私はなりは小さくとも勇気があり、またあなたのように鋭い歯は無くても、あなたの歯で切れない物でも噛み切れる強い歯を持っています。ですから、いつかあなたが困った時にやってきて、きっとあなたを助けることができるだろう、と思うのです。

(まあ、何と大きな物の言い方をするねずみだろう)

と、ライオンは思いました。

(私を助けるって？ そんな考えは全くバカげている)

しかし、ライオンは鹿を食べて昼寝をしていたところだったので、おなかが全くすいていませんでした。それで、

確かに私は今、小さい君を食べなければならない程おなかがすいていない。だから君を自由にしてあげよう。運のいいねずみだ。

ライオンはねずみを放してやりました。たち去って行くねずみにライオンは後ろからからかうような声で呼びかけました。

いいか、君は約束したぞ。いつかこの私を、ライオンを助けるとな。ハ、ハ、ハ、...

それからしばらくたったある日、ライオンはつい油断して獵師のしかけた網のわなに捕らえられてしまいました。ライオンは歯で網をかみ切ろうとしましたが、その歯はロープを切るのには向いていないので、何度も試みた後、ついにあきらめざるをえなくなりなした。

何と言うことだ。少しの油断で命を縮めることになってしまった。これで私もおしまいだ。

こういって、怒りと悲しみの大きな唸り声をあげました。

絶望に打ちひしがれていたライオンは、突然何か小さな生き物がロープをかむ音に気がつきました。あのねずみです。ねずみはせっせとロープをかみ続け、ついにライオンが出られるのに十分大きな穴をつくると言いました。

さあ、私は言った通りに約束を果たしましたよ。

ライオンは感激してねずみにお礼を述べ、そして、

これからあなたたちねずみを、ただ小さいという、それだけの理由でバカにすることは決してないだろう、

と、言いました。

この話は、アメリカの学生にはなじみのあるものであったが、私自身には初めて読んだ時はむしろ新鮮な感じを与えるものであった。なぜなら、私にとってなじみの深い日本版の『ライオンと鼠』の話とは、次のような話であったからである。

ある日、うっかり者のねずみが誤って寝ているライオンの上に走り登ってしまいました。うす茶色の土もりと間違えてしまったのです。

ライオンは眠りからパットさめてとび起きると、すばやく前足でねずみを押さえました。

誰だ、わしの眠りをさまたげるのは！

ごめんなさい、許して下さい！

ねずみは悲鳴をあげました。

ライオン様のお体とは知らないで登ってしまったのです。

ねずみは涙を流して、ひらあやまりにあやまり、ライオンの許しを乞いました。ライオンは最初は、気持ちの良い眠りをさまたげられて腹をたてていましたが、そのうちに一生懸命に許しを乞うねずみが哀れに思えて来ましたので、

このうっかり者め、まあいい、できてしまったことは仕方がないから今回は許してやろう。しかし、これからは十分気をつけるのだぞ。

そう言って放してやりました。

はい、気をつけます、気をつけます、ありがとうございます。

ねずみは何度も何度もおじぎをして喜んで帰っていきました。

それからしばらくたったある日、ライオンはつい油断して猟師のしかけた網のわなに捕らえられてしまいました。ライオンは必死に網を噛み切って出ようとしたが、できません。ついに諦めて、

(もう、わしの命も終わりだ)

と、思いました。

その時です。ライオンはカリカリと網を噛む小さいけれどしっかりした規則的な音を聞きました。そこでは、いつかのあのねずみが網を噛み切ろうと、せっせと働いていました。ねずみは、

ライオン様、ご恩返しにまいりました。今お助けしますから、しばらくご辛抱下さい。

と、言いました。そして、次々と丈夫な網を噛み切ると、ライオンをついに助け出しました。

助けられたライオンは喜んで言いました。

おまえはよく私のことを憶えていてくれた。これからも末長く私のよき友でいておくれ。

そして、それから二人は死ぬまで仲の良い友達になりました。

この2つの寓話を素材として、学生達がそれを私やお互いとの対話を通じて、日米の文化的違いを浮き彫りにするように料理する。それがうまくできれば授業は成功であった。

さて、この2つの『ライオンと鼠』の話について、それぞれが今、それぞれの文化の中でのモラルを表現していると仮定する。なぜならイソップ童話はモラルについての寓話だからね。だからそう仮定した時、アメリカと日本の2つの文化やモラルについて対比をなしている、あるいは意味が異なっている、そういう点は何かな？

私は、まずこう学生に問いかけた。もちろん私自身いくつかの答えを用意していたが、それを最初から教師がいつてしまつては教育にはならない。また、学生との対話形式の授業は私が考えてもいなかった点を学生が指摘し、私自身も含めてクラスがそれから学ぶことも多い。

どういふ点でもいいんだ、何か思いついたことはないかな？ 「アメリカのねずみはとてもアメリカ的で、日本のねずみはとても日本的だ」、つていった学生が前にいたけれど、なぜかつていふ説明が入つてさえいりゃー、立派な解答だつたんだけどねえ。

学生が思わず笑つてリラックスしてくる。クラスを見渡すとマーク・デイヴィスが微笑している。経済学科の学生で長身。社会学にも関心があるらしく私の別のコースを以前にとり、期末小論文では際だつた論理が私に印象づけた。

デイヴィッド・ライトマンがしきりに2つの寓話を読み比べている。小柄な極東言語文化研究学科の学生で、親の仕事の関係で日本に数年住んだことがある。日本人であるジローを別にすればこのクラスでは日本語が一番できる。

高橋次郎ことジロー、は日本からの留学生で略称を MAPS と呼ばれる学科を指定しない社会科学部修士課程プログラムの学生である。私のコースは本来学部学生向きなのだが、本人の希望もあつて大学院生である彼が取ることを特別に許可している。なんとか良い成績を残して、社会学科の博士課程に転籍したいという希望だ。

エミリー・スチュアートがノートパソコンに何か書き込んでいる。自分の考えをメモしているのだろう。文化人類学科兼極東言語文化研究学科、いわゆるダブルメジャーの学生でいつも自分の考えを要約しているのが上手だ。

ウェンディー・スミスは今にも何か言い出しそうにしている。社会科学の学生で議論好き。活発に発言してクラスの議論に貢献する。今日も彼女が口火を切るかも知れない。

ジェフ・トミオカは他の学生達を見まわしている。社会科学の学生で日系四世。略称を ASA という大学内のアジア系学生会の幹部であり、独特のユーモアの持ち主で政治活動も活発と聞いている。

ケヴィン・チェンはまっすぐこちらを見ている。中国系アメリカ人。政治学科の学生で法科大学院にすすむ予定だ。

メアリー・リチャーズが空をにらむようにして考えている。同じく政治学科の学生。日本の政治制度に興味があるらしいのだが、しばらく前から彼女の日本文化に対する否定的発言が目立つようになった。

文化の理解というのは複雑なものである。多くの日本人は西洋人の日本への「無理解」は無知から来るとナイーブに思いやすい。だから、西洋人が自分達を、そして日本文化を、知れば知るほど日本的発想やその立場に添って考えてもらえると考えやすい。つまり「理解」は「ご理解いただけること」と同じで、こちらの理屈を仮にそのまま認めないまでも頭から否定はしなくなる、と思いがち。もちろんそういった場合は多い。しかし、その反対だって時にはあるのだ。つまり、知れば知るほど日本的発想や理屈に反撥しそれを否定するようになることも。メアリーはいわばそのようなケースであった。

やはりウェンディーが討論の口火を切った。

ロゼットと我妻も言っていることですが、日本のねずみが日本的なのは、自分の行いをまず謝って相手との失われた感情的な調和っていうんでしょうか、それをまず回復しようとしてる。それに対してアメリカのねずみはもちろんアメリカ的で全く謝らない。

まずは妥当な点だ。少し掘り下げていけば、面白い議論展開になるだろう。で、

日本のねずみはまず謝った。ではアメリカのねずみはまず何をしたのかな？



私はクラスを見渡す。

当然まず計算した。相手に何をどういったら自分の命が助かるかって。

と、マーク。

みなにやにやする。「考えた」といわずに「計算した」といったのが言い得て妙である。

そのとおり。で、その計算した結果謝らない、なぜなら謝ったら....

損害賠償責任がある。代金として、ねずみはライオンの腹の中。

と、すかさずジェフ。

今度は大笑い。良いムードになってきた。

でも、それだけじゃない、それだけが謝らない理由じゃない。

と、デイヴィッドが言いだした。

ここでは、つまりアメリカの話の設定だと、ねずみは道義的に謝れない。

お、なかなか面白い点をつきそうだ。私は期待する。

どうして？

と、珍しくジローが発言する。彼は普段はまだ英語のハンディキャップがあってあまり議論には参加しない。

道義的に謝れないって、どうして？

じゃあなぜ謝る？

と、デイヴィッドは逆にジローを向いて聞き返す。

そりゃ、ライオンの眠りを妨げた、てことになってるから。

でもこの話じゃね、もしライオンの眠りを妨げるのが悪いと思っているならねずみは最初からこんなことしない。仲間に勇気を見せるためにやったので、悪いなんて思っ  
てない。だから、それが失敗したからといって「悪かった」と謝ったら、態度が一貫し  
ていない。

と、二人の応酬。ここで私も参加する。

そう、ここではねずみがライオンの背にのる行為の仮定が違っているんだよね。ア  
メリカの話の場合は故意で、日本の話の場合は...

「過失」と、幾人かの声。

デイヴィッドの言ったように、故意にした行為を結果的に失敗したから謝ったと言  
うのでは道徳的な話にならないよね。これは日本でも同じだから、ねずみの行為を過失  
と仮定する必要があったのだらうと思う。じゃー、アメリカの場合を過失だと変えた  
ら...

The mouse would be looking bad.

と、ジェフが笑わせる。

(なるほど、それじゃあねずみはカッコ悪いか)

よし、じゃあーカッコいい (looking good) アメリカのねずみは、故意にやったが  
失敗して、マークの言うように計算した。で、何をどう計算したのかな？

それは、もちろんどう取引したらうまくいくか。ライオンに食物として殺して使う自分をいかに安く見せ、自分を生かしておく利益をいかに高く見せるか、それを計算した。

と、マーク。経済学科の学生の面目躍如だ。

そのとおり。だから、アメリカの話ではライオンが鹿を食べたばかりで腹がすいてないことになっている。ねずみだけじゃ無くライオンも計算するしその計算に関係するからね。日本の話ではこれは関係ないから言っていない。でも、アメリカの話ではライオンが腹がすいてないと仮定しないと...

100万ドルの宝くじより、現金の10ドル。その結果ねずみはライオンの腹の中。

ジェフがまた笑わせた。

では、ほかに日本版とアメリカ版の違いで気がついたことは？

話が途絶えたので、私は話の転換をはかる。それを待っていたように、エミリーが発言した。

日本の話のモラルの1つは前の授業でもやりましたけれど、恩返しです。つまり、恩恵を受けたものはそれを返さねばならないという規範です。これはねずみの言葉にあります。もちろん、これは日本的モラルですからアメリカの話にはなくて、そのかわりにアメリカの話には対応するモラルとして...

うん、アメリカの話の方では...

私はつい先を促してしまう。

正式には、ここには契約はないんだけど、契約の順守の規範じゃないかと思います。約束を守ることが大切だと言うモラル、それが強調されていますから。

期待しているような答えを学生の方から自主的に言われる時の満足感は格別だ。

でも、

と、ウェンディーが言いだした。

「恩」って、ルース・ベネディクトは一生無制限な返済の義務を生じるほど大きな恩恵って定義してますよね。けれど、私はここではライオンがねずみにあまり大きな恩恵を与えたとは思えないけど。

えー、でも...

と、ジローが反駁する、

ライオンはねずみを許して命をうばわなかったんだから。

そりゃあ、ねずみにとっては大きいことかも知れない。でも私はライオンのことを言ってる。だって食物としてのねずみなんてライオンにとってはたいした価値がない。たとえば今、億万長者がちょっと自己満足に慈善を施すつもりで貧乏人に1000ドルあげたとする。億万長者にとっては1000ドルなんてどうでもいい金額。でも貧乏人にとってはひと財産。だからといって貧乏人がその恩恵に対し一生無制限な返済の義務を生じなければならなくて、それはちょっと納得できない。

そう、日本版の話では、なんかライオンとねずみの間に根本的な不平等があるのよね。

と、メアリーが唱和する。

すこし私が介入しなければならないようだ。

確かに日本版の話ではライオンとねずみの間では地位が同等でないとは仮定されているよね。でもライオンにとってはどうでもいいことだから自己満足的に慈善をほどこすつもりでねずみを許した、て解釈はどうか。話の意図としては、ここではライオンは、ねずみが自分の過失について恐れおののいているのを見て気の毒に思った、ねずみ

に情をかけた、それで許したってことになっている。確かにこの情は、たとえば乞食を憐れんで施しをする人の慈善の気持ち、と無縁とは言えない。でも、私はそういった人の情けによる慈善行為を、偽善だとは思わないけれど。

でも、

と、ウェンディーは反駁する。

もしライオンを、日本版の話の筋にしたがって、「過失を犯した者を裁く立場にある者」として、もしその過失が「Oops! Excuse me!」と喋ってすむ程度のものではなかったとした場合、相手が謝ったから、反省したから、ただ許すっていうのは道徳的な話にならないと思う。罪を犯した者はたとえ過失であってもそれに対して責任がある、という考えが抜けているし。

ここは重要な点だ。アメリカ人学生の多くはウェンディーと同じ疑問を持つ。

過失であっても罪を犯せばそれにたいして責任がある。それは良くわかるよ。でも、「自分の行為についてとるべき責任はとれ」という道徳とは別に「責任感のある人になれ」という道徳もあると私は思う。たとえば今ある国で、仮にここアメリカで、人がみな自分の罪や過失についてそのつど責任を取る、いや取らされるとする。すると、人は責任を取ったあとは自分の罪の決算はゼロというか、もうこれ以上何も負い目はない、と感じるようになる。そう思わないかい？

ウェンディーに問いかける様に私はいった。

そりゃ、そうだと思う

と、ウェンディー。

だから逆にね、多くの人が自分の行為について、たとえばそれが悪いことでも、その結果取るべき責任との損得勘定で、どうするか決めるということも考えられる、そうだよな？

ええ、そういう風に考える人も多いただろうと思います。でも、その行為自体が良いか悪いか、という道徳的判断で決める人も少なくない、と私は思うけど。

私が、言いたかったのはね。

(さて、これからがちょっと難しい。解かってもらえるかどうか)

もし罪があってその場で償いをさせられずに許された場合は事情が違うってことなんだ。その人は引き続き将来にわたって負い目を負う、という点が違う。日本人は人に謝る時「すまない」という表現をよく用いるけれど、これは古くは「このままでは自分の債務が終わっていない」という意味だとも、「これでは負い目のために心が澄まない」という意味だとも言われている。どちらにしても、謝罪しそして許されるということは、罪の決算も心の決算もゼロにはならず、マイナスってことになる。だから将来それをゼロにしたい、あるいは少なくともマイナスをこれ以上大きくしたくない、そういう気持ちが生まれる。日本版の話でライオンが「これから十分気をつけるのだぞ」と言い、それに対してねずみが「はい気をつけます、気をつけます」と答えるところがあるけれど、私は許されたことによってこのねずみは、これから自分の軽率さのせいで人に迷惑をかけまい、と思うようになる。そう期待されていると思う。でも、もし、ここでねずみが罰を受けたとする。それでもねずみは、これから自分の軽率に気をつけるだろう。でもそれはまた罰を受けるのが怖いからで、自分のしたことが悪かったと反省したからではないだろう、と思う。

(ここはやはり少し難しいかな)

と、私は補足の説明を考える。

すると思いき書けず、エミリーがびっくりするような助け舟を出した。

私は、教授のいうのはこういうことだと思います。私達の文化では、罪の意識と言うのは、その行いが悪いことだという道徳的判断が自分自身の心の中に生まれることで内面化された、と考える。でも、ヤマグチ教授がいうのは、日本では必ずしもそうではない。日本では人に損害を与えた行いの償いを未だしていないという人や社会への負い目の意識が生まれることで内面化された、と考える。そういうことだと思います。

私は彼女の要約に贅辞を惜しまなかった。そう、その点がまさに日本の文化における「恥」を、人の評価に縛られるといった外面的なものとしてしかとえらえることのできなかったルース・ベネディクトに対し、恥をもっと内面的な罪に近いものとして理解する作田啓一の『恥の文化再考』における出発点でもあったのだ。エミリーはそこをいとも簡単に飛び越えてしまう。彼女の理論的センスは抜群だ。

しかし現在の日本において、恥の意識は作田啓一が描いたように内面的な道徳として日本人の心に引き継がれているのであろうか？ 私はそれが気になった。先日日本に戻ったときに目撃した、ある電車内での光景が浮かんだからである。人々を追跡するパネル調査とその分析の専門家として、最近私は日本でこれから生まれてくる全国の赤ちゃんのうち1万人ほどを何年にもわたって追跡調査するコホート調査の企画についてアドバイスをしていた。コホート調査では子育てのあり方に深い関心を持っている。そんなことが頭にあったとき、その電車内のエピソードは普段アメリカで暮らす私には衝撃的だった。

地下鉄の電車内で3歳ぐらいの女の子が大声を出して騒いでいた。昼過ぎの比較的空いている時間帯である。母親は

ちゃん、お願いだから、うちに帰ったら大きな声を出してもいいから。ほらみなさんが見てるじゃない、だからお願いだから静かにしてちょうだい！

と、懇願するように言い、女の子は「イヤー！」とさらに大声を張り上げ、母親は消え入りたいようなそぶりで「お願い！」を繰り返していた。

こんなとき、アメリカの母親ならどう対応するだろうかは容易に想像できた。

Listen!

と、まずアメリカの母親は子供に重々しくいうだろう。場合によっては

Listen、スーザン・スミス！

などとフルネームで呼ぶかも知れない。普段ファーストネームでただスーザンと親しげに読んでいる親が、他人行儀にフルネームで呼ぶときは親が個人としての相手に厳しい態度で臨んでいることを意味し、それだけで子供の背筋をしゃきっとさせる効果があるのだ。そして、

騒がしくして人々の耳を煩わせることは良いことでないことは分かるわね。それにここは電車でパーティー会場ではないの。公共の場所なの。だから特に静かにしなければいけないの。

などと、取るべき行動とその理由を説明し、それでも子供がわからず屋で「No!」と言いつけるなら、多くの母親は人前でも頬を平手打ちするなどして罰を与えるだろう。

一方、電車内での日本の母親は子供の行為の良し悪しの理由を全く説明せず、うちへ帰ったら大声を出しても良いと場の違いにより勝手に許されるということを示唆し、人目を気にしろとの外面的な恥の意識を起こさせ、わがままな子供を怒るでもなく、ひたすら「お願い」を繰り返すというありさまであった。これはアメリカの母親がどう振舞うかを見慣れていた私にはまさにショックであった。そこには「恥の文化」は反映しているとしても、親が子供自身にこんなことをして恥ずかしいという気持ちを持たせるようにするのではなく、むしろ親自身が人目を気にして恥ずかしがり、子供の態度をただ嫌がっているという状況があった。

一昔前の日本の母親なら、いやたぶん現代でも心ある母親なら、ただ人目を呼ぶことの非や自分自身の都合などでなく、違った形で「恥ずかしい」という意識を伝えたはずである。私が未だ幼いとき隣人であり母の親しい友人であったある婦人は「人様に迷惑をかけることの恥」とその道徳と対の「人様に役立つひとになることの徳」を自らの子供や幼かった私に説いた。また自らそういう志を持つことだけでなく、そういう志の友を持つことの大切さも、そういった志の人が世の中では粗末にされることはない、またそうあってはならない、といった信念も、子供にわかりやく話してきかせた。彼女はある会社の社長夫人であり、彼女の説く道徳には明治以降に醸成された経済人の日本的組織倫理が理想化された形で表れていた。それは個人の自由な競争における私利の追求は自然に効率的分業を生むので良い、というアダムスミスの「神の見えざる手」の哲学とも、プロテスタントの勤勉と禁欲の宗教道徳が資本主義の精神の土台を作った、というマックス・ウェーバーの理論とも、全く異なるもので、「人様に役立つことをすると



いう志を持ち、その志のある人と共に働き、人に生かされ、人を生かす」べし、というような倫理であった。

もちろん現代の日本の母親の子育ての態度は一様でない。母の友人のような倫理で自覚的に子育てをする母親はもともと多くはなく、今は一層少ないであろう。一方アメリカの母親のようにことの善悪の理由を子供に述べる母親は増えたであろう。また、全く別な日本的な対応もある。以前、似たような場面で別の母親は

ちゃん、ママはそんなことする子、嫌いよ！

という言い方で子供をしかりつけていた。その母親は人目を気にしていた母親とは違い、子供に正面から向かってはいた。しかしそういう育てられ方をすると、子供はことの善悪は理屈ではわからず、ただこういうことをしたら好かれるとか、嫌われるとかの感受性が育成されるだろう。またその結果、自分にとって身近な人の感情を感じ取る力をつけ、そういった身近な人間に好かれるように嫌われぬように振舞う態度を身に着けながら育っていくように思える。子育てにおいてどういう規範が用いられるのか。それは、行いの善悪の価値判断とその責任の意識なのか。「人様に迷惑をかけず、人様に役立つ」というような価値判断なのか。好き嫌いの感情操作による人に好かれる態度の強化なのか。ただ望ましくない行為が人目につくことを非とする外面的な恥の意識の強化なのか。自らをこんなことをして恥ずかしいと感じる内面的な恥の意識の育成なのか。はたまた、西洋人には一貫性のない道徳と思われる「場」による態度の使い分けなのか。親が、意識的あるいは無意識にどのような規範をもってどう子供と向き合うのか、その結果はこれからの日本人がどのような社会的倫理観を持つに至り、世界の中で自らの尊厳を保てるか否かの道筋に大きく影響すると思えた。

こういった想念はエミリーの発言にともなって頭の中を駆け巡った。が、授業はまだ続いており、今はそちらに専念する必要があった。

「恥の文化」には、それが作田啓一の主張したような内面的要素が維持されるならば、決して西洋の「罪の文化」に劣るとはいえない。私は、学生に対しその点についての説明を具体的にすべく、日本での警察の始末書の制度や関連する初犯の起訴率の低さなどについて述べ、またオーストラリアの気鋭の犯罪学者ジョン・ブレイスウェイトの理論について紹介した。

ブレイスウェイトは恥の機能には2つの側面があると強調した。ひとつは犯罪者に犯罪者の刻印を貼り社会から締め出し犯罪者が犯罪者としてしか生きるほか道をなくしてしまう機能。もう一つは、その反対に、犯罪者がその罪に対する恥の意識を内面化することを助けることによって、いわば犯罪者が「恥を知る者」として更生することを助けることによって、彼らの社会復帰を促進させる機能。

ブレイスウェイトは後者の恥の機能は西洋で全く認識されていないが日本での犯罪者の更生倫理に見られ、この倫理とその制度化により日本は低い再犯率を達成している、と言う理論をぶちあげていた。その理論はアメリカの犯罪学者の間でもある程度注目を浴びていた。そういう説明をしているとき、今まで発言しなかったケヴィンが今日初めて質問した。

教授、それらの例はみな刑事問題の話ですが、民事問題はどうなっているのですか？ やはり同じ様な考え方が民事訴訟の結果にも反映されるのでしょうか？

私は、日本では民事問題は訴訟に至ることが少なく、まず双方の和解をはかることを目的とするさまざまな公式非公式の制度があることを説明した後、こう述べた。

でも、最終的に民事訴訟になって加害者の賠償責任が明らかになれば、当然相当する賠償額を支払うことになり、そこはアメリカと違わないと思うけれど。

それは実際に与えた損害額の賠償だけですか？

え？

と、私は聞き返した。法律の専門家ではない私にはケヴィンの質問の意味が良くわかっていなかったのだ。

それは、もちろん、そうだと思うけれど。

もしそうなら、日本はアメリカと違います、こちらは州にもよるけれど、故意の加害行為には懲罰的損害賠償（punitive damages）を適用するのが普通ですから。

懲罰的損害賠償？

ええ、たとえば加害者が被害者に実際に与えた損害額が10万ドルだったら、裁判所が加害者に懲罰金の30万ドルを加算して40万ドルの支払いを命令したりすることです。

と、ケヴィン。そこにマークが対話に参加してきた。

さっき、教授もいいましたけれど、人が、それが悪いことでもその結果取るべき責任との損得勘定でどうか決める、という態度を仮定すると、その勘定の結果得だからという理由で人に故意に損害を与える者が出てくるわけです。だけど、懲罰金も加算されるのなら割に合わない、そう潜在的加害者に計算させて加害の発生を抑止しよう、そういう意図です。

なーるほど。では私がさっき言ったように、ねずみに、また罰を受けるのが怖いから悪いことはやめよう、という意識を持たせる。そして効果的にそうさせるには罰を重くすればよい。そういう発想だね。

はい、そうです。

と、マーク。

私はひとつの疑問をケヴィンにぶつけた。

ふむ。でも、まあ加害者についてはそれでもいいとして、これはケヴィンに聞いたいんだけど、被害者の方はどうなるのかな？ 損害額だけでなく、追加の懲罰金ももらって、かえって金がもうかる、そういうことになるのかな？

はい、そうです。まあ、弁護士にも大分持っていかれませんが、民事訴訟で金をもうけることは十分可能です。それでまた訴訟が増えるんですが。

民事訴訟が増えるアメリカの制度的要因はまだ他にもあった。たとえば成功報酬のみの弁護士費用の制度で、正式には「不確定料金 (contingency fee) 制」と呼ばれ、日

本のように着手金や手数料や日当や諸雑費の実費などのほかに成功報酬金がある場合と異なって、弁護士が被害者に対し損害賠償の訴訟に負けたら一切弁護士費用を払わなくても良いが、勝った時は勝ち取った金額の40%程度の比較的高い割合を弁護士費用として支払うという契約条件で、原告として訴訟に持ち込むことを勧める制度である。民事訴訟ではそういったケースがほとんどであった。

なんだか、その制度は弁護士達の陰謀の結果みたいな気もするなあ。できるだけ訴訟を多くさせて金もうけしようとの。

思わず私はそうつぶやいたが、ジェフ以下そうだそうだと言った学生も多かった。

デイヴィッドが発言した。

センセイ、今の議論からも感じるんですが、アメリカ版の『ライオンと鼠』の話は、もう今のアメリカの社会の話とするには古すぎるんじゃないか、という気がします。トラブルの解決に弁護士が出てこない、というのもあまり考えられないし。まだほかにも、具体的にはうまくいえないけれど、古いなと感じる点があるんです。

他の多くの学生も「同感だ」とう意志表示をした。

デイヴィッドがそこだけ日本語で「センセイ」と言ったのは、彼を含めた極東言語文化研究学科の学生のうちの少数の特徴だ。

なるほど。では、どう話を変えたらいいのかな？

すぐに、応答はない。この質問自体具体性に乏しくすぐ返答を求めるのはむしろかしそうだ。

日本版の『ライオンと鼠』の話も古すぎると思う。

と、今度はジローが言いだした。

だって、恩返しなんて道徳、もう今は僕らはあまり気につけない。

ジロー達の世代では、そう感じるのは無理からぬことだった。

では、ジロー、君なら日本版の『ライオンと鼠』を今風に書き変えるとしたら、どうするかな。いや、今すぐ答えが無くて、たとえば宿題としてやって見る気はあるかい？

いや、僕はそんなのできません。教授こそおやりになったらどうですか？

現代日本の若者というのは、ジローに限らず、どうもこういう時は積極性がないし、やたら如才がない。しかし、やはりここは確かに学生だけに仕事をさせるというわけにはいかない所だ。

よーし、じゃあ現代日本版の『ライオンと鼠』については私が考えて書いても良い。ただし、ひとつ条件がある。一応今から2週後の授業までという期限で、誰か1人でも2人でも現代アメリカ版の『ライオンと鼠』の話を書く気はないかい？ 私と競争で書いて、他の者が審査員になって、もし私の日本語版の話よりうまくできていたら、このコースの成績に大きな追加得点をあげる、という条件で。私のより仮に悪くても少しは点をあげるよ、もちろん内容に応じてだけれど。

クラスの中がざわついたが、すぐには応募者は現われなかった。創作文学のコースでもないコースでのこの異例の提案には、仕方のない反応かも知れない。

しかし、デイヴィッドが、ついにおずおずと手を上げた。

センセイ、僕書いてもいいんですが、僕も1つ条件があります。

条件ってなんだい？

元々のイソップの話は、アメリカ版であれ日本版であれ、道徳的寓話なんです、僕は現代版のアメリカの『ライオンと鼠』は道徳的な寓話としては書けないという気がするんです。だから寓話ではあるけれど道徳的な話でなくともよい。それでいいですか？ それだったら何とか書けるような気がする。

おう、いいぞ、やれやれ。

と、私が答える前にジェフが言った。

私ももちろん同意見だ。

もちろんそれでいいよ。考えてみたら私も現代版の日本の『ライオンと鼠』を道徳的寓話として書くのはとても難しい気がする。だからお互いに何の制約もなしに自由に書こう。

それで、この問題には決着がついた。予定していない「余計な」仕事ができただ、少数であれ学生の能力を特別に引き出すためには、時折こうした余計な仕事は必要になる。1時間20分の授業もそろそろ1時間をまわろうとしている。今までの内容はまあ自分でも満足が行くものだった。しかし、もう一点肝心な点を議論しなければならない。

さて、アメリカと日本の『ライオンと鼠』に1つ共通点がある。日本の話のライオンとねずみはその後友情で結ばれる関係になったとされている。アメリカの話のライオンとねずみもお互いを尊敬できる関係になったと考えられる。これは、友情で結ばれた関係とは違うが、どちらの場合もお互いに信頼し合える良い関係が生まれた、といえる。ここで、ひとつ見逃してはならないのは、アメリカのライオンとねずみの場合も、日本のライオンとねずみの場合も、共に自分達の文化の中でお互いの言葉や行動について共通の理解のもとに行動した、という点だ。だから、そういった共通の文化の基に言葉と行動の意味の正しい理解があって、かつ誠意をもって行動した結果、人と人の信頼の絆が、いやそうじゃなかった、ライオンとねずみの信頼の絆が、生まれたといえる。では、今仮に誠意はあるが、文化の理解がないとする。つまり今仮に日本のねずみがアメリカのライオンに、またアメリカのライオンが日本のねずみに、それぞれ出会ったとする。ここで、アメリカのライオンとねずみも日本のライオンとねずみも自分達の文化しか解からないと仮定する。さて、その場合の結果はどうなるかな。たとえば、日本のねずみがアメリカのライオンに出会ったとしたら...

それは、さっきジェフのいったように、「よし、責任を認めな。じゃあ、まあ損害賠償は他に何なさそうだから、まあ小さな肉のかけらでがまんするか」と、いうのでライオンがねずみをパクリ。

と、マーク。

そうだよ。だからこの場合はいい結果は生まれない。じゃあ、逆にアメリカのねずみが日本のライオンにあった場合はどうなる？

これは、態度がでかいとか、英語でどう表現するかわからないけど「ナマイキダ」ってんで、やっぱり、パクリだな

と、ジロー。

ジローは「ナマイキダ」と日本語で言ったので、これは「自分より地位が下だと思っている相手があたかも対等な者のように振る舞うことに対する怒りの感情」だと説明した。

私もジローもいう通りこの場合もやはり良い結果は生まないと思う。この2つの場合は共に文化の違う者がお互いの考え方、特に言葉や感情表現に表われた合図の意味、を正確に理解できないまま交わると、例え自分なりに誠意をもって行動しても信頼し合える関係を結ぶのはむずかしい。そういうことを意味している。このことは大切なので頭に止めておいて欲しい。さて、何かほかにアメリカと日本の話の違いについて気がついたこととか、ここが理解できない、とかの質問はあるかな？

これで今日のメニューはほぼ終わったな、と私が思った時、メアリーの発言は起こった。

教授、質問ですが。

はい。

今の話に関係するのですが、たとえ文化的に共通の要素があったとしても、日本の話でライオンとねずみは最後に友達になった、とあるのがどうも納得できません。この話ではどう見てもライオンとねずみは対等ではないからです。

やはり彼女はこの点にこだわっていたようだ。

なぜなら、ねずみはとてもへりくだった卑屈な言葉使いをしていますし、ライオンはその反対です。それに、さっきウェンディーが言った不平等の問題もあります。この状況で、ライオンとねずみが友達になるというのは不可能だと感じられるのですが。

つまり、地位の対等でない2人の間に友情などありえない、と、そういうことかな？

と、私。

そうです。

と、メアリー。

あなたの言わんとするところはわかるけれど、

こういった言い出し方は不必要で、かえってメアリーの反発を買うのは過去の例で解かっていたのだが、自分の口調というのはなかなか変えられるものではない。

でも友情にもいろいろあると思う。つまり地位が対等でなくても、上の者が下を思いやり、また下の者が上の者に忠実に誠意をつくす、というようなことから生まれる相互の信頼の感情は、友情に通じるところがある、と私は思うのだけれど。

でも、私には日本版の話のライオンの態度は、偉そうにふるまいかつ保護者ずらをするといったこの態度は、私達には我慢のできないものに思う。ねえ、そう思わない？

メアリーは隣に座っているウェンディーに同意を求めた。

えー、私もそう感じます。でも..



と、ウェンディー。

でも、さっきの「ナマイキダ」という言葉の教授の説明からロバート・パークの今から50年ぐらい前のアメリカの南部と北部の比較を思い出したんです。パークによれば、当時のアメリカ南部では黒人が白人に対して「礼節にかなう適切な距離」をおいて接する、という様な態度が普通で、そういった人種間の社会的地位の上下関係を黒人が受け入れていた状況では、たとえば白人の地主夫人(landlady)と黒人の召し使いといった間柄に典型的に見られたように、黒人と白人の個人間に相互の親しみや信頼の感情があったのに対し、黒人が人種間の地位がより対等だと感じ、そのようにふるまったアメリカ北部では、まだ多くの白人がそれをあるべき態度として受け入れていなかったの、黒人と白人の個人的関係の間の相互の親しみや信頼の感情は生まれにくかった、と書いているんです。だから、地位の違う者の間でも、お互いの間で上下関係の意識にずれがなければ、地位が対等でなくとも、信頼や親しみがおこることがあるのではないかと思います。今でも勤め先でボス(上司)と親しいとかいうことはよくあると思います。でもそういう親しみは常に自分が地位が上だと偉そうにふるまうボスにはではなく、職場の地位は違って、自分を対等に扱うボスにしか感じないと思います。だから私も、パークの言うようなことは理屈としてはわかって、自分の実感としてはありません。

ロバート・パークとは20世紀前半のアメリカの代表的社会学者の1人で当大学社会学科の当時のリーダーでもあった。ウェンディーの意見は卓見であった。逆にいえば、どんな場合でも、職場の地位は違って、個人間の関係を基本的に対等であらねばならない、と見る見方が身についた現代の多くのアメリカ人には、日本版のライオンとねずみのような関係は情緒的に受け入れられないところがあるのだろう。その反対に、地位の差とそれにふさわしい態度を仮定する日本人には、ライオンの立場にたてばアメリカ版の話のねずみの態度に対して「なまいきだ」といった、現代のアメリカ人にはほとんどわからない、しかし50年ぐらい前のアメリカ北部の白人が黒人の態度に対して感じたのと通じるところのある、感情的反発を持ちやすいのだ。

メアリーのウェンディーの意見に対する反応は私とは趣を異にしていた。

ふーん、そうなの。結局はやっぱり不平等な社会に特有な感情ってことね。

偏見のある言い方だ。私もこれには黙っているわけには行かない。

メアリーのコメントはちょっとおかしい。つまり彼女は日本社会が不平等な社会で、アメリカ社会はそうでない、と暗黙に言っている。実際には、アメリカと日本でどちらが不平等な社会かは簡単には比べられない。

アメリカと日本の社会的不平等の歴史的違いや現在の主な相違点について述べた後、私は続けた。

だから、問題はどちらの社会がより不平等だということではなくて、どちらの社会にでも見られる個人間の社会的地位の違いを前提とした時、地位の異なる者の中で相互の個人的な親しみや信頼の感情がどうして日本でアメリカに比べてより可能か、ということだ。ウェンディーの発言はそれについて、実にいい所をついていた。でも、彼女も理屈ではわかるが実感はできない、と言っている。どうしてかな？ そこが私には、どうも良くわからない。たとえば、身近な例として兄弟や姉妹の関係を考えると...

突然メアリーが、話の継続をさえぎった。

教授！ あなたは兄弟や姉妹は地位が違うと考えているのですか？

まずい例だった、と認めざるを得なかった。その慌てた気持ちが、次の応答をも不十分なものにさせた。

いや、大人になれば兄弟や姉妹の地位の違いなどないだろうが、子供の時にはたとえば2歳違いでも、経験とか知識が年上と年下ではずいぶん違うから

教授！

メアリーはまた私の説明をさえぎった。

あなたは私の間に正面から答えていません。日本では、チエ・ナカーネが述べているように、学校でも職場でも1年でも違えば「センパイ」とか「コーハイ」とかいうランクを区別し、地位の違いの意識を持つんでしょう？ だから兄弟や姉妹でも同じこ

とで、私は教授が日本人的なそういう意識で、兄弟や姉妹は地位が違うと考えているのかどうか、それを聞きたかったのです。

中根千枝に言及してくれたおかげで、私はこのやや挑戦的な質問に冷静に対処することができた。

日本人的意識か、そりゃあもちろんあるよ。私はアメリカに長く住んでいるとはいえ日本人だからね。特に日本に行くと、敬語の使い方とか、年令とか地位の違いを考慮した話し方をしないと礼を失するから、好むと好まないとにかかわらずある程度そういった年令や地位の意識を持たざるを得ない。けれど、アメリカの生活では言語にそういった機能はないからそれを意識しない。でも少なくとも私はどこにいても年令であれなんであれ属性で人を差別したりはしないよ。また日本では兄弟や姉妹については第二次世界大戦以前は戸主制度というのがあって長子が法的にも特別の権利を持っていたけれど、戦後は性別や出生順序によらず兄弟や姉妹は法的には平等となっている。一方兄弟姉妹や先輩後輩の関係は確かに前の授業でやった中根千枝がというような縦の関係で、意識されている序列という意味で地位といえる。でも、それは人々が序列によって権利や身分が違うなどと意識しているということではなく、日本には身近にいて経験の多い者を敬う伝統があったり、またいろいろな機会がいずれみなにまわってくるけれども序列の順に与えられたりする慣習が広く残っているせいで、序列を意識せざるを得ないのだと思う。もっとも最近の若い世代では、そういう序列の意識も大分薄れて来ている気がするけれど。

そうですか。それならけっこうです。

メアリーは一応矛を収めたが、明らかに不満をひとまず抑えたという応答であり、表情は硬かった。一方、私自身も彼女の挑戦的態度にとまどっていた。クラスに気まずい沈黙がしばし流れた。が、ここでエミリーが沈黙を破る助け舟をだした。

教授。私、ひとつ質問があるのですが。いいですか？

はい。

日本版のライオンとねずみの話でライオンは「できてしまったことは、仕方がない」と、言っていますが、これはちょっと理解しにくいのです。正確には、どういう意味でしょうか？

ライオンは良い眠りを妨げられてしまった。けれども、今更ねずみを罰しても良い眠りが返って来るわけではない、ということだと思うけれど。アメリカでも、「こぼれたミルクについて悔やんでもしかたがない」と言う諺があるでしょう。

それは全然状況が違います。ミルクをこぼしたのは自分の過失です。自分で責任をとるのは当然で、あとから後悔し続けてもしかたがない、ということです。でも、この話の場合はねずみの過失でライオンが被害を受けた場合です。ですから状況が違います。

それもそうだ、と半分納得しながら、なおも私はこう述べた。

でもね、結果においてはやはり同じだともいえるよね。人を責めても自分を責めても、良い眠りはもとに戻らない。だから、しかたがないことに変わりがない。と、こういう考えじゃないかな。

その説明は全く理解ができません

と、エミリー。

他の学生もエミリーに同意を示している。

アメリカ人には仏教的諦観といった気持ちに相通じるところのあるこの考え方を感覚的に理解できないのも無理はない。

そうか、こんな説明じゃ解からないか。困ったな。でも、もう授業時間も残りがない。じゃあ、仕方がないから、私の次回までの宿題ということにしてほしい。

最後によやくクラスの雰囲気が和んだ。

次回「ライオンと鼠：日米規範文化比較論・後編・」では、現代アメリカ版と現代日本版「ライオンと鼠」から見えてくる日米の社会規範・倫理の変容に山口教授と教え子達が批評精神たっぷりに挑みます。どうぞお楽しみに！